



和漢文孫美之回

山文庫



○美表類

剃髮文

東菴坊

柳後園の吾仲剃髮して遠く國を去るるとも
近く世々の樂に入らんともそよ人角の如く
身をたたくと界の輪廻とらんともく
き所もその仰のまのいのみさ
とらよと顛倒とも法轉とも
はらふと世に輪廻

和漢文

くちりくちりもは抑のちいおしやうくちりくちりもは抑
くちりの取とすくちりのちいおしやうくちりくちりもは抑
て能はれ自在にあそむ時を専らと事途のゆりの
ちりくちりもは抑くちりのちいおしやうくちりくちりもは抑
帰後ちりくちりもは抑くちりのちいおしやうくちりくちりもは抑

○註曰△取林清規剃髮文流轉之界中因念受不能斷
妄因入無及真實報恩者△佛經善男子善
女人上受生ヲ和スル勸善ノ詞ナリ△禪録之泉村叟老
耆如トハ片山里ノ愚マラ云リ△取林清規得度ノ下ニ
之飯戒ヲ授ニ詞ニ師云汝能持不沙弥云能持

△高沙院經三十八折言願アリ細奉ニ及ス△教行信證主區流
ノ各ナリテ愚禿ノ沙汰アリ一向ノ文秘訣ナリ△禪語沙只
莫慢人莫見人慢○西ノキ世の中此人ノ世白の松原
ワラワレのガクンヤもまれ○控もくもめとあふ地
及くもチのちのおとをくもあれ●白鳥文集匹如身
後有何事應向人間無所求○梓弓ハ剃ノ詞寄ナリ發
心ノ多シ●白詩坐歌遙向孤雲上聖主來迎落日
前△清規授戒下誦授皈依之室語之遍皈依皈依
法皈依僧云△又不知ニ牧起請ノ詞ヲ四支枝名ノ結語
○禪云けり例の虚証やうくちりくちりもは抑のちいおし
能はれ酒落とつりくちりくちりもは抑のちいおし
されいけり表類ノ主ナリと別發ハ仰ル皈依

なりてうらまの罪と懺悔をうたへしとて選場の
備と申すに吾仲と文鑑と各録ありてなり其事此
序ありて石阿の他語のる第十直秋の今のはる

通夜物語表

渡部記

世に傳ふは作やむとていへどおの國より下りての技と
稱もつて一邦の部のそのまといへと輪のまとい
しんふと井筒の井とありてを居ちりていへと
万の民とていへしはよふとわらわの輪の記あり
て千尋とて重武の石造堂ありてなりとていへし清輔

袋取申すもいへし國の縣郡之輪の御事御事
言ひしはよふとわらわの輪の記ありてなりとていへし
ありていへしはよふとわらわの輪の記ありてなりとていへし
かかしていへしはよふとわらわの輪の記ありてなりとていへし
よへとわらわの輪の記ありてなりとていへしはよふとわらわの
の記ありていへしはよふとわらわの輪の記ありてなりとていへし
氏ありていへしはよふとわらわの輪の記ありてなりとていへし
中には儒家の文章とありていへしはよふとわらわの輪の記あり
終に他語の記ありていへしはよふとわらわの輪の記ありてなり

へ大和辭句といひ求韻の雅語といひ辭類といひ和漢の
 ちいさと密の引類といふ大の不明といふ今
 九條と和漢の碩学といひ我が家の文道といひ
 といひ法式といひの私をまゝといひかゝるべき
 といひ一冊といひ子歳の真をまゝといひかゝるべき
 の歎状といひ東華式といひ一冊の設といひ一子録
 五倫の文といひあやまといひ雅語といひ條のほといひ
 文章といひ五條の式といひまゝといひと和漢の撰
 といひ遺行の文といひ和の秘といひといひかゝるべき
 我師の言語と表といひ史記の談言假中といひ例の例

く例のまゝといひ例の又倫と和まゝといひいふまゝといひ
 といひ一老といひ人といひ原といひまゝといひ温といひ
 といひ一厲といひまゝといひ一ちの言といひ虚言の自在
 言語の可といひまゝといひまゝといひ我言の言といひ
 といひ一義といひまゝといひ信といひまゝといひま子の釘語
 といひ一和といひ愛といひ誹語の家といひつらといひ仲
 といひ一終といひ今といひ産神の法といひまゝといひ
 といひ一和といひ和の歎状といひまゝといひ我子といひ
 といひ一あといひまゝといひまゝの罪といひまゝといひ
 の功といひまゝといひまゝといひ和の道といひまゝといひ

師の法とてさういふは、
佛はといふは、儒はとやうけ、
佛の世はといふは、
時、享保丙午の二月十二日、
まゝして、けきとまゝとて、
誠恐、頓首、敬白

○註曰△吾手因入無爲上、
吾道一以貫之、
宵一刻價千金、
白馬遺訓ヲ摘ナカラ、
ト翻シ一以万貫ト轉スル等ヲ、
言フニ及ス百千万ヲ以テ之、
△禪録、
△論語、
△詩格、
△佛書ニ結、

一キナリ ▲論語四科十哲ノ名録アリ、
武洛角ニ枚、
辟言ハ、
子夏カ入アリテ、
曰、
△論語、
トナリ、
ラキキ、
七ノ子ノ、
本朝ノ始ト云キナリ、
竹木アリ、
出山佛ノ古アリテ、

燬香爐ノ因縁トシテ△老子經ニ辱_レ而不恃_レ即成_レ不居_レ△祖翁
遺稿トハ難_レ波遺_レ快_レ△章_レ及故_レ校_レ以_レあり_レ支_レ考_レて_レる
照_レ推_レトアリ_レ貞_レ享_レ式_レハ五_レ秘_レノ才_レトシテ△自_レ集_レハ俳_レ諧_レ遺_レ訓
ナリ四_レ十二_レ條_レノ象_レ法_レアリ_レ減_レ後_レニ其_レ集_レヲ_レ論_レテ_レ白_レ馬_レ經_レトハ
内_レ人_レノ_レ稱_レ名_レトシテ△貞_レ享_レ式_レハ俳_レ諧_レ式_レ目_レナリ_レ用_レ捨_レ古今_レノ_レ違_レ
アリトシテ△大_レ和_レ詞_レニ_レ冊_レアリ_レテ_レ先_レ師_レノ_レ新_レ撰_レナリ_レ漢_レ書_レノ_レ卯_レ字_レニ_レ和_レ訓
ヲ_レ加_レテ_レ大_レ和_レ貞_レ名_レノ_レ用_レトス_レ五_レ美_レノ_レ古_レ法_レヲ_レ以_レテ_レ詠_レセリ_レトク_レ△辭_レ類
引_レ類_レハ_レ本_レ朝_レ文_レ鑑_レニ_レ細_レ註_レアリ_レ其_レ題_レト_レ見_レル_レ△歎_レ快_レト_レ我_レ身
ノ_レ支_レ孫_レ云_レヲ_レ教_レヘ_レ奉_レテ_レ官_レ祿_レヲ_レ整_レム_レ時_レノ_レ詔_レ快_レナリ_レ歎_レハ_レ苦_レ管_レカ
ナ_レト_レ撥_レ又_レ大_レ和_レノ_レ故_レ文_レト_レ△東_レ卷_レ式_レハ_レ貞_レ享_レ式_レノ_レ附_レ録_レニ_レシ_レテ
多_レハ_レ月_レ花_レノ_レ設_レナリ_レ△二_レ子_レ録_レハ_レ先_レ師_レノ_レ衣_レ訓_レニ_レシ_レテ_レ時_レ且_レノ_レ二_レ子_レヲ_レ以_レ
テ_レ世_レ法_レノ_レ用_レトセリ_レ△二_レ條_レ法_レハ_レ十_レ論_レニ_レアリ_レ△五_レ條_レ式_レハ_レ文_レ賦_レニ_レアリ_レ共_レ三

其書ニ見_レキナリ △授記ノ二_レ子_レ佛_レ經_レノ_レ語_レナリ_レ按_レ五_レ二_レ切_レ經_レハ
多_レハ_レ燃_レ灯_レ佛_レノ_レ授_レ記_レニ_レシ_レテ_レ例_レニ_レ述_レ而_レ不_レ作_レトス_レ△聖_レ經_レ辭_レ又
ナ_レハ_レ多_レニ_レモ_レ祖_レ翁_レノ_レ授_レ記_レト_レ云_レリ △史_レ記_レ滑_レ徒_レ晉_レ替_レ談_レ言
微_レ中_レト_レ俳_レ諧_レハ_レ微_レ細_レニ_レ物_レ情_レヲ_レ尽_レテ_レ言_レ語_レノ_レ的_レ中_レト_レ云_レリ_レ按
△二_レ條_レ段_レハ_レ二_レ條_レ法_レノ_レ結_レト_レナ_レカ_レラ_レ老_レ若_レノ_レ一_レ對_レ六_レ字_レ對_レト_レ云_レリ_レ意_レ對
△二_レ子_レ文_レニ_レ筆_レ台_レノ_レ絶_レ妙_レト_レ稱_レス_レ△論_レ語_レニ_レ君_レ子_レ有_レ心_レ變_レ望_レ
之_レ儼_レ然_レ而_レ之_レ也_レ温_レ聽_レ其_レ言_レ也_レ厲_レ △我_レ貞_レ享_レ公_レ事_レ我_レト
子_レ貞_レト_レナリ_レ禪_レ語_レ坐_レ斷_レ天_レ下_レ舌_レ頭_レト_レハ_レ人_レニ_レロ_レシ_レ明_レセ_レ又_レ事_レナリ_レ
△史_レ記_レニ_レ孔_レ子_レ誠_レ子_レ貞_レ曰_レ美_レ言_レ信_レ慎_レ言_レ故_レ按_レ五_レ二_レ事_レ我_レ
子_レ貞_レハ_レ言_レ語_レノ_レ科_レニ_レ章_レ早_レカラ_レ折_レ々_レニ_レ言_レ語_レヲ_レ誠_レテ_レ其_レ等_レノ
懲_レ焉_レヲ_レ勸_レ破_レシ_レテ_レ釘_レ語_レハ_レ頓_レ坐_レノ_レ絶_レ妙_レト_レ稱_レス_レ △俳_レ諧_レ字
ト_レハ_レ中_レ古_レノ_レ夙_レ云_レリ_レ言_レ偏_レト_レ人_レ偏_レノ_レ論_レハ_レ十_レ論_レノ_レ才_レ一_レ段_レニ_レ貞_レレ

大和集

△史涪程曾其父常以談笑詛諫詛諫稱美孔子家語
 二出文り△惡懲罪善勸功ハ勸善懲惡ノ常語ナカ
 受テ文章ノ裁断ト云テ格ニ倒持ノ絶妙ト稱スレ
 ○評云けまゝと自家の凡聴論を評法と減と
 入似たれと始段とと存神の法録をまゝとりて内雅
 生知のあゝとあり中段と我師の之科と
 あげて他道建立の證文とあり結段と存神の
 親愛とあ中へて百世の法光と称せよと色きん
 早美と歎法の在例とありてまゝと文句の起落と見
 てまゝと言語の虚実とまゝと表法とて一悲慕の
 あやうららりとまゝと命一減かまゝと減は
 むへまゝとまゝと作者の評詞あり

○教令之類

庠山公九錫俳諧又 宋袁淑

勅乃之軍陸邁糧運艱難謀臣停美武夫
 吟嘆雨乃長鳴上堂慨慷應邦崎嶇千里
 荷囊致餐食用捷大勲歷山不利斯實雨之
 功也走隨時興晨夜不默仰契玄象俯協
 漏刻應更長鳴豪分不減雖契奎著稱未
 足比德斯又雨之智也青背絳身長頭廣
 額修尾後垂巨耳雙磬斯又雨之形也嘉

事既孰實須精麵負磨迴衡迅若轉電惠
我衆庶神祇獲厚斯又爾之能也是用遣
中大夫向丘騾如爾使銜勒大鴻臚班脚
大將軍宮亭侯以湯列之序江江列之序
陵吳國之相序合浦之朱序封爾為序山
公

○評云此文之案の事文取取よく極むのハ字も
とくなくけ西をけれれ他諸の道といふ史記滑稽傳
とんとあけられの六藝といひてあるを傲中といひ
解給といつた大史云々賛詞より優旃を談笑と言

語のあといとらへ優孟を諷諫の勸懲の用とあ
りて姚察の評林にも滑稽傳猶俳諧といふれり
俳諧と俳諧との俳諧の字論といふれり俳諧
の文とあつたり馬の官禄とあつたり俳諧
供奉の行将をといふくらういふこと言法の遊より
漢とといふ文とあつたりやいふと笑ふの令城と
あつたり風曲より俳諧ありてまをく俳文と云ふ
我文採の選場よりあつたりれりいふも家の秘蔵の松と
蒼蒼豎公の九錫といふりてこれに和漢の文對とあつ
た今に俳諧の名といふものいふも又三章に虚文
の鑑といふ返書といふものたのこいふか所もいふ
事文取取と林羅山の語といふものたのこいふか所もいふ

あられい漢音の通をさる我中華の語を可なりとありて
きくしはあね江神の文ありしは後ハ俳諧の風言なり
ふの訓新なりと推考の法はあじりるくもやね勤
あるをなせり

蒼髯公九錦俳諧文

并名連

むし黄帝の時ハ蒼髯ハ作れり子廿万本の
ふらよとほり所あり梅福の色よととと蒼髯の
手よたうもとねちちも操あれし十八乙此
各位と湯ううたのふのふ本よととれりいなり
江の徒あもやらめち奉王の法持のびりしる

のあにけくそよ也。法さぬひみそとトせし唐人
の風よもほやけも。衛士の又あう女言もあれたそ
のねたよまうも色のひたを色の法をまははれ
そねの法言よありり。ねをまのなとさされり
一ハ歳末もけ法代り。さうかうて奉袍ハ厚懼よの威儀
とほくらふ。と名ハ村の言おれしり失ととて法のこもれ
幸あもやらめ我おのり。うと君の福のひのきほ
しひれく女后更衣のきり。らひより年も姫の俗
あやうて。新位者のよちの法はとあれ。唐崎のね
ひより年と。み曾孫のねも。頬はくくもふて世と

教ありぬにせむ松も葉も白くはれはれはらむて扇と鏡
 とのおしとそむちりしる家即家れが美例いふよりて
 田にくりし番ありし大工た官の家くからて万民これ
 と賞賜て今も祝言の才一と祝へとげふは所は
 ちのうらてはせきくけの素あもやはけくとも和漢の
 ぶきよたわれかく文章に各と傳ふちり命し一室に
 之林の各よきき金城の松を臺に一株九曲の松あり
 も枝と枝のまよ様くうけ枝と虎の尻の尻をたけり
 一園中双の本ちりてく享保のころ地の明の月
 天帝の命ありて蒼蒼鬚公の各とかみむり九品の

宿禰と陽子松を非松の地ふくおはの各よま又婦の
 信あれあもや君臣のれあうんちとくらもく作れ
 ひさくくく近くとも今のせめ松もきくくにかして
 世家のいさくさゆてく松もはくまもまをりて九錫の恩
 と忘れされと色こたにおり桐子門のまもく一舟各連
 くけのりく馬と松との能證し和漢のあつらひあり
 と他陽文し和くかまむ者則天様かこれくくは
 九錫の次才さのやんくくを車馬二くを衣服むく一舟於
 のほれこまもく馬一車に谷のくをひらて鐘山の鶴は
 死んくかりてまもくを松の鬚とくまらりては松

のびらりと降るにや色はひるぬのちもあふらう。世に
 衣よせといふもあふれぬは虎責を汝の目にあむと
 びらりに凡庸とてそと得小[△]帝と成るもそは
 の能りあれた月を老と挿地とふこもそ本[△]の産と
 まらむと一[△]の[△]刺器と汝の家あう[△]第[△]を[△]野[△]の
 ねを[△]と[△]とい[△]ら[△]も[△]音[△]も[△]海[△]て[△]を[△]ら[△]も[△]れ[△]ら[△]の[△]流[△]
 と[△]ら[△]も[△]一[△]の[△]琴[△]の[△]ま[△]の[△]風[△]や[△]ら[△]ん[△]吾[△]年[△]の[△]愁[△]と[△]く
 一[△]も[△]互[△]の[△]納[△]階[△]と[△]い[△]ら[△]も[△]朱[△]戸[△]と[△]く[△]ら[△]り[△]松[△]老[△]
 其[△]室[△]の[△]結[△]梅[△]あ[△]ら[△]の[△]の[△]の[△]と[△]志[△]と[△]一[△]も[△]七[△]の[△]矢[△]と
 一の用いあはるるもあはれをまよあはれ行はるる[△]

の矢と得ふるのありとやのあふ[△]藤[△]屋[△]南[△]天[△]の[△]う[△]え[△]と
 かなむとさうひらきとあはれと一[△]は[△]鉄[△]鉄[△]の[△]海[△]
 離[△]あ[△]れ[△]の[△]あ[△]ら[△]に[△]本[△]鎮[△]と[△]と[△]と[△]得[△]の[△]凡[△]の[△]木[△]村[△]の[△]海[△]
 一[△]も[△]は[△]な[△]の[△]男[△]あ[△]ら[△]と[△]さ[△]ら[△]も[△]一[△]九[△]の[△]種[△]凶[△]と[△]上[△]代[△]
 の[△]小[△]紋[△]字[△]と[△]て[△]天[△]帝[△]と[△]ま[△]ら[△]と[△]ま[△]ら[△]の[△]利[△]の[△]
 一[△]も[△]ま[△]ら[△]て[△]と[△]ま[△]ら[△]の[△]あ[△]ら[△]の[△]轉[△]掛[△]と[△]の[△]副[△]集[△]を[△]
 一[△]も[△]と[△]と[△]轉[△]掛[△]と[△]本[△]鎮[△]と[△]か[△]ら[△]り[△]枝[△]本[△]の[△]ね[△]と[△]あ[△]ら[△]
 て[△]温[△]館[△]あ[△]け[△]の[△]前[△]の[△]と[△]く[△]火[△]掃[△]解[△]打[△]の[△]空[△]と[△]は[△]ら[△]む[△]
 和[△]漢[△]の[△]和[△]房[△]と[△]前[△]と[△]一[△]も[△]の[△]凡[△]和[△]と[△]ま[△]ら[△]と[△]あ[△]ら[△]
 一[△]も[△]松[△]崎[△]の[△]春[△]石[△]と[△]ら[△]り[△]あ[△]ら[△]松[△]崎[△]の[△]と[△]あ[△]ら[△]と[△]あ[△]ら[△]て

海の定名此山觀と云々、海の鬚の定名、
 のも海より、
 位と云々、
 の清統方と、
 の此清と、
 此れ通用と、
 此れのみ、
 の。年も本も、
 之解ら、

かん茶意の鬚冊と云々、
 此の御と、
 此れ、

○註曰△文選冊類ニ魏公九錫文アリ潘元茂ヲ作り其註
 諸侯有徳天子錫之一錫車馬云九錫ノ名ハ今ノ文ニ
 アリ冊ハ今ノ諸侯符也ト△ハ帝詔王令ノ類ト知キナリ
 ▲淮南子ニ蒼頡始視鳥跡之文造書契云黃帝時
 ナリト△吳志ニ丁固夢松謂人曰松十八公也後十八歳吾
 其互心云松スルニ此ノ字ハ錫文ノ用ナリ故ニ別立ラセ
 テ黃帝ノ年ト成セル多ク俳諧文ト云テ富言ノ絶妙
 ト稱スキナリ△高砂記中ニ松ト云テ其言ノ趣向
 ナルコトあり、
 ト成セハ其訓ノ詞ヲ攝テ約テ十品ノ裁入アリ遂ニ三卷

ト大和詞ノ後部ニ註セリ
▲卧毫臣ト孔明ナリ
四國志
徐度曰孔明即亮也先主之從乃見之車馬ハ之請身
敬ナリ▲鍾山鶴ト周顒ト偽隱ヲ云一北山後々意帳
空兮色鶴然心或ハ截未轉社ヲ喜津トアリ按スルハ一
三草ニ電ト云々鶴ト云々總テハ松ノ縁語ヲ故言ヲ摘コ古語
ヲ採ル時ハ此等ノ歳入ヲ鑑トスレ●松ノ蒼蒼豈ハ削ノ官名
ナラハ風梳新柳髪ト云々都良香ノ詩勢カラ令口ニヤ
蒼蒼ト縁トノ互照ヲ見ル○時雨松ハ前ニ出タリ○遍照
歌ニ世と云々小言のなと云々いふかたてあくらりいふ
ぬぐり縁む按スルハ錫ハ孔明ト周顒ト漢家ニ因顧ノ
故言ヲ摘ク慈鎮ト曲照ト後朝ニ艶色ノ古歌ヲ採リ
テ多ク和漢ノ文對ヲ將テ詞ノ裁斷ハ削ノ言ハス此等ヲ

錯綜ノ絶妙ト稱スレ ○奇院ヲおもひのち山守の松
風かきわたりつれのとくろろをそとく ●史記本紀
舜彈五絃琴ヲ歌曰南風以薰兮解吾民之愠 ●按ス
ニ此一章ハ松ニ樂器ノ自在ナル松籟ノ寄ハ更ニシテ琴ヲニ詩歌ノ
和漢ヲ對セル此等ヲ雙文詞ノ絶妙ト稱スレ ●八仙詩 帝之
漢酒美少年皎如玉樹陰 凡前ニ按スル此一章ハ植木屋
ノ松ノ起語ニシテ粉黛ノ姿ヲ作止トナリ ▲文選曰九錫
拒毫一占珪瓊副璽云々按スル此一章ハ八錫ニ俳諧ヲ
書尽シテ云々拒毫一占トハ立白訓トモニ讀ミ難キヲ強
博學ノ矚ヲ飾ラス日本ノ俳諧師ハ讀メヌトテ副璽ノ二
字ヲ漢文ニ假テ九錫自ヲ合セタル矣ハ吳中ニカラ言テ
文ニ隱見ノ絶妙ト稱スレ○宗テ言々常盤らり松の

みくろしとまらぬんがうまのなをさるりきり△晋王義之
愛竹曰一日無此君耶△△梅ヲ天嶽トハ歌舞地ノ優
言ナリ然ハ夫ヲ松ト云イ天神ヲ梅ト云ルハ松竹
梅ノ寓ニシテ此等ヲテ今ノ詠諧ト云ハシ難波物語ニ
まけよ一の浦をねんとあり△松を其臺ハ金城ノ安
町ニ西ニアリ○能登をちとをりかきれる松しりあし
ふしはれくよるの代や海△馬ニ無相トハ衣冠ヲ
云イ△松ニ有情トハ夫婦ヲ云ルニ畢竟ハ有無ト次女情トニ
文字ノ嚙ノ自在ト云ハ互照ノ絶妙ト稱ス○白手天
詠ニ明神ト樂天ト詩歌ノ争アリテ多ク和漢ノ勝者ヲ
結語セリ詩ヲハ例ノ又まニ及ス○田村詠ニまよと本しは
かたその園をねんつれ鬼のまよしりあし△風雅鮓

ト云イ俳諧各ト云ルニ條法ハ前ニ出タリ△梅ニ此二百ハ
一篇ノ物結ニシテ汝ノ鮓ニ其風ヲ舎シ汝ノ名トハ其鮓ニ
寄セテ虚誕ノ中ニ家法ヲ忘ル増テ蒼々ノ詠ノ一對ニ
詠ヲ尽シ祝言ヲ調フ誠ニ俳文ノ鑑ト云キナリ
○詠ニけりをく能登ト云フニ格と清と成と總云
の九陽ト云フニもまをれ能登のまをりやとる
ときをねりよ入とらをり托物比興の法と云キナリ
ト云フニ詠諷の用と云フニこゝハ決矣の遊と云フれ
はとりあちやまとありト云フニ檀林の物に
は書れ糸の石とまひ六花の楚りしあきよま
た史るう高名と云フニあきよま史記のやとる
と云フニあきよま詠諧の新なりト云フニ

此語の虚言なりとやいふ所の二箇の字表淑と
舟を連して文に此語の虚言とくく舟と和漢の脈筋
とよんどもしられし表淑を傳字に以て張とす
耳にそとく同しれぬまじし舟を例の
舟語よりて舟と云ふとなくとむれとこと
大和の舟と云ふ舟と云ふは舟と九陽とあるに
非營の二字此言訓と云ふとて論語の不知と不知
ことと云ふとんと此語の虚言なりと云ふと
文人と蒸殺し近くと倭國の子を有と有
況や此條の舟と云ふと云ふは九陽の舟と
とも人の虚言なりと云ふと云ふと一箇の語改
てにありて一箇の語改てにありて例の語改

文の例の訓諫に用と云ふと云ふ一と云ふと今此
二箇とより述べて此語の用とせしめんと云ふと文の
のありしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
ととと連二の語と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
也といふ連と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
の用と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

花削札

原義経

け花に南不取也一花於折盜と云ふ
者任天永紅葉と云ふ例伏一花名可前

一指者也

壽永二年二月一日

○浮云は削札を世くしむるはくくして或と誤りしもの本様
ありて兵庫各所記しむるも記さるに南不才也
とありて不才の字を南に記しむる或と誤りし節と
班波く別當原削札の取入花削札は清平の并
帝のしるはに江南梅花折一枝者可慮濃科
者也とお認るに美作の流ありて花と折花の誤り
不折ありし隆く文に記さるるに江南梅花
折一枝可切一指者也と今之に記すに班波

の削札と誤りしもの本様ありしもの本様
後部ありしもの本様或と天市紅葉の削札も代り削
の削札ありしもの本様又後部ありしもの本様
所と并記すに削の武貴ありて殿所の二子のまの
ちりと一枝の削札ありしもの本様
又事の傍に記すに美作の削札ありしもの本様

極樂寺教

並發命

是仰房

知了とれは是仰房の削札ありしもの本様
の中に極末といふ削札ありしもの本様
純子の削札ありしもの本様

のちやひの葉もさかたにけりしとちやる満陀師と
ころあるにけりしとちやる満陀師と
匠もたのあひさかたにけりしとちやる満陀師と
おちやるにけりしとちやる満陀師と
世界ありのりおちやるにけりしとちやる満陀師と
もなと極末よににおちやるにけりしとちやる満陀師と
ころありとちやるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と
極下の陰影あるにけりしとちやる満陀師と

大抵書出

三

師して天龍七夜又七版のほどよくんとして今時、森
いづくを起し回ふに仰禮とまされん念師と戸
七なく集は種所の洞とちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と
ちやるにけりしとちやる満陀師と

大抵書出

三

父母といふなるものさうまといふんはと極楽の傍
をなすてさうた花のむとさうまといふんは
いとす所の極楽さうまはけり新地はれさうま
とあはれり極楽のさうまといふんは月次の
とあはれり極楽のさうまといふんは月次の
名判といふんは極楽のさうまといふんは

四季花鳥

梅

梅のむとさうまといふんは極楽の

そ仲言

尊

そのやさうまといふんは極楽の

貫仙

梯

七寶の梯さうまといふんは極楽の

依巴

すま

すまのすまといふんは極楽の

天明

橋

さくら花の橋さうまといふんは極楽の

盤泉

編福

かきほらやむとさうまといふんは極楽の

許丹

桂花

石人

あけがけやきよかたけのた

厚

胡休

降せうこのきよかたけ

菓

里風

湖のそよよきよかたけ

斤籍

中ト

みとさくみいふとさく

雪花

商角

後々花院のそよよきよかたけ

天人

陸夜

極東のそよよきよかたけ

○譯云世教と全く誼讀ありてふよは解とらふな
りて從はらふをいふ事の本意上七疑八核の曲の節
と云くそよよ向作のそよよと稱と一まくは足許房
いそ所の陰号よりてあしよの傳本の書法を所

○書状類

年始状

左衛門尉

春始のそよよ向作のそよよと稱と一まくは足許房
いそ所の陰号よりてあしよの傳本の書法を所

幸甚く折歳初朝花の朝日之く次不
申之處神駈人の子日遊之向之思
仙首学忘檐花苑小蝶遊日影頸背中
候平将又揚了花小勝負呈懸小串今
急物遊之九手夾八的等曲節近日打
孫受之尋常射手弦挽速者少有法
思食之給者奉也心子能多為期
く次余不勝感毫望謹言

○浮云は世に在訓は来し也
大和と真名をとりあつたは此之疑より

或は能平よりもと和訓の厚弱
とてそと漢文の假書とて
と漢文の助語とあつたは
とて和漢の两用と通
の中懐ちるやむら
唐との證とて漢文とち
も名はと此通用の書
の記し

遣庄五郎書

楠正成

け度自一人の事下り非不
歎書殿成也く若き

此書を讀むと其の旨を知らずして其の次一巻とて其の旨を
むとて其の旨を知らずして其の次一巻とて其の旨を
宗廟と云ふ事ありき

八月十九日

〇

深ふは遠くをたふさむの如き事ありて其の旨を知らずして
あやふくありしはれは其の旨を知らずして其の旨を
知れぬと云ふ事ありしはれは其の旨を知らずして其の旨を
宗廟の二字に配して其の旨を知らずして其の旨を
まゝにあり

遺書

熊谷入道

一 先祖相傳所領安堵御判七并保え之
以来至建久年中軍忠御感状九一
通有之事

一 對主君不可成運儀并
可守之事 武道

一 上人御自筆御印書并
可成信心事 迎接曼陀羅

右之箇條至子孫能く可令存知
旨其外依其身器可覺悟者也
仍置状如件

○侍ふに書きたる子息お次郎の遺訓せまらんこと
三妻あり申一と家名の由縁とほしく申せらるる所の
美記云と一才と人向のサ帯と云らるる御事あり
にありて勇氣と削のふらふらと没や信のこ子と
わて又常の釘鉄くおらるるやまられらるおのこはと
まらるるおらるるの勇れお号はふらふらと一とせはふ
瀧望のを言ふて飛ねの御事といふ一とせはふ
物の様事と云らるる一と下子六の遺訓といふ一

馬存文

荒木山城守

熊申入候近日西国可令下向惟拙子

好物共色々可^レは調置惟聊^ハ無御了断
頼入候恐惶謹言

天正三年八月日

阿彌陀殿 冬

○侍ふに作るる丹波の城々々々天正の比の由將あり
まらるるは馬存と白絹の四半ちりおらるる朱とては又
とまらるるははらへ金の輪の御事ありおの仲り中曾人乃
又とまらるる聊野ちりいふれははらへ西戸の事とては
もとの様柄あり創戦の中とありまらるる事の花は
おらるるははらへをたはらへと能治の御事あり
けふ操と名と他はちりはらへ

各五老井狀

蓮二房

久敷打絶佛病氣可心之存作不從橋屋法狀
到素撰集之佛不審共逐一令之承知作志比
者重鈴八菊杯後之將貴意惟由病中之
佛器号尚心不撻内勇健之段悦入惟来此集
出板之後送者奉祈佛存命作然則此度逢法
各申惟謂選文選之意趣乃者就風俗文選
之中而再選申度事四五也其才一者我家之
文章惠可有虛實之認事才二者假名之

叶韵卿可有以立橫之違事才之者和訓之文法
衣可有語路之拍子事其次者有假名真名
之配事其次者有標題之取捨事右之五條
者於互老井貴老與先師相談之時而之被
成合點臨出板之節文章手弱所聞則不懼
武士之撰錄中如本佛直儀而先師在京之比
也則校合麼隱可申肯從井筒屋內意心有之
與哉左有事者不抱世間之評刺不取墨人
於相手與者通作互老之家凡此美者遺舊行
之法式則其昨如佛諸涅槃經此所如南無

佛語似一蒼之散，向教乎在許拉和漢之
學者，而唯可惡者言語之虛實也。其辭則如
文選之直，有傳，坐斷天下之舌頭，其自慢者
家以之建立，而智迦副有，唯我獨尊之語，別
數不成，兼好法師，摩有七品之自讚，其曾
以人不憎，有者虛實無虛實之跡，故也。然摩其
傳，亦有奉四季之發句，而所刺給自慢之釘，假令
其句故光明，共人情之極者，其實也。其九在那丹設
燒給不佛，度對者當，後至之身，而仰之一字，為
認其實，摩佛語之二字，為認其實，摩何欽者

可分其罪，第矣佛語者好，不忌談矣之用，言語
散者可越，松坂與所右之條，久者先師之遺，年而
答，佛中而大肯也。將又我黨之所，冀有為守老
之文章，二之篇，而此度成文章之飾，則文選之外，各
名成，然上之戲論，而文章之文情，者可傳，而世
厚哉，况以貝不或，凡雲之沙法，多係給謝公
之筆力，則選場之大幸，何事知之矣。其故封，其
於而祖公羽之悍，則林火香，而董誦再之，而申遣
候貴報者，例之奉，待抑後園，惟

多罪之誠恐煩者

傳ふは状々傳文のほねあつて御下屋土の物字をやつて
て例は和漢の通用とあるがこゝに魚錦といひ
翰書令書といふものもこれの常用といふらんまう
我がものさるる達と論語のしよも庭訓もよも
あつたといふの日用とまひはらんやあつたか
こゝに寶永の中比ふん選文選のそりよは
先作と許六と贈答の論あつてこゝに先作と
いふものも一は寶永の幸郊とせとらりぬらん人
こゝに遺余とらとつて書と又を井と再作
本邦文鑑の一助きとんとよはるるとは佳と未の
秋ちりよとまれよと又を一人とせの幸郊の秋と世
と辞とつてよと比を鈴と湖南よりりて又を世

病床よりあつてつて落柿舎と五を井と此筆初載
よ及するは諸は来のこゝに今の休書のある
とよのすはつてつてや洋と文鑑のあつてつて
こゝに人の命終あらんまよかりに我所と世を凡雅
よ李杜のあつてつてつて重魚論又といふ
よ歳一遇の知にあつてつて我が家のまよといふ
横説はまよといふものもあつてつてつてつて
けははのほちりる

け二件と松子庵の秘事と
百景二巻の幸のつてつてつてつて
はつてつてつてつてつて

文操卷之四終

廿七

文操卷之四終

陸山文庫

